柏樹

題字
南　勇　会長
川口市退職校長会
会報　第２６号
令和５年２月１日

先生ほどの職業はない

佐藤　英雄

悪い言葉と汚ない言葉は使わないを心情に歩んで来た。教諭の時「休み時間には何をしてもいいが、人のいやがる事をしてはいけません。」と言った。「いじめる」を置き換えたのであった。心和した教室を目指した。教頭で赴任し巡視の折、ガラスのこわれが目に付いた。全部入れ替えて朝礼で言った。「こわれたガラスはみんな新しくしたのですっきり見え気持ち良くなりました。今日もしっかり勉強致しましょう。」「割る」という言葉は使わなかったが職員も気を遣った様であった。校長が会議から戻ると、校庭に白い紙が落ちていた。そのまま通り過ぎて校務員に話した。朝礼で校務の仕事を紹介し感謝の念を伝えた。「私は、きれいで美しい○○○小学校でしっかり勉強して頂き度いと思います。今日もそろって勉強致しましょう。終わります。」と結んだ。「落とす」「拾う」はついぞ口にしなかった。退職後H中学校の相談員を務めた。登校時刻の一時間前に昇降口に立って、挨拶を受けた生徒に、はっきりとひと言「お早よう」と答礼した。毎朝、全校数答礼を交わしたのであった。「答礼は相手の目を見て相手を上回る声で」である。実に、「答礼が挨拶を育む」であった。二年女子が相談室に来て「茶髪を衝かれて困っている」とのこと。話を聴き終わって私は黒髪について話した。「日本女性の美しい黒髪は世界の憧れの的なのです。君も其の黒髪を持って居るのですから大事にするといいよ。」と説いた。終始茶髪という言葉は控えたのであった。其の生徒が保健室へ参って先生に「わたし茶髪やめます。」と言ったと耳にしたのであった。S校長先生から「朝礼講話に、代わって壇に立つように」と複席給わったのであった。今も「たたら荘」へ通って「説話」を語っている。正に「先生ほど面白い職業はない」である。

ありがとうございました。

学校教育の温故知新

城田　元昭

私が卒業した小学校が、今年開校150周年を迎えた。

卒業アルバムを開いてみると私の学級には54人の顔がある。

今では学級編制基準が変わり、一学級の人数が減ってきて教師の負担が軽減されていることだろう。

だが、学級の子どもの数が減れば教育効果が高まるかどうかは疑問だ。

少人数学級にすれば、個に応じたきめ細かな指導がしやすくなることは確かだ。しかし、子ども同士が自分の発想に基づいた考えを出し合って学び合い、高め合う集団学習の良さが失われてしまうのではないかと危惧する。

現在、文科省を中心にパソコンやタブレット端末、インターネット等の情報通信技術を活用したICT教育が進められている。

教室に電子黒板が入り、子どもたちにはタブレット端末が配布されてパソコンも活用されている。

だが、授業においては直ぐに調べられることによって想像力を働かせる場が減ってしまうのではないかと考えてしまう。

これまでの黒板にチョーク1本の授業形態は日々変化している。

しかし、情報収集の枠を広げるだけでは豊かな発想は期待できない。テレビ会議で遠く離れた子ども同士の情報交換も可能になっているが、見知らぬ同士では価値ある対話は成立しない。

人間関係づくりの基礎を築く最も大切な時期において、幅広い人間関係や社会性を育てるためにも集団の中での対話の重要性を忘れてはいけないと考える。これからを生きる子どもには、更に豊かな想像力と創造力が求められることだろう。

ICT教育のメリットばかりに目を向けるのではなく、デメリット解消に向けて集団学習の持つ良さを再認識することも必要ではないだろうか。

教育現場を離れて10年以上たつが、学校教育の現況には関心を持ち続けたいと思う。

― ちょっといい話 ―

蘇る音楽の喜び

関口景子

退職を迎える最終年度は、全国一斉の臨時休校から始まった。入学式は6月。ようやく始まった新年度も、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止対策として、授業において学級全員による音読、グループでの話し合い活動や実験活動など、皆で声を出したりともに活動したりすること全てが止められた。

確かなことが何もわからない状況下での感染症対策である。子供たちの健康に関する安心、安全の確保からは致し方ないことも理解できる。世間では、「マスク会食」なる言葉もすっかり市民権を得て、人と人とが距離を取ることが当たり前になった。

だが、こうした対策、社会の動きによって、ここから二年にわたり、音楽科は壊滅的な状況に陥ることとなった。いったい誰が想像しただろう。歌わないこと、リコーダーや鍵盤ハーモニカは吹かないこととされ、声や音がすっかり消え去ってしまった音楽の授業を。当然、校内音楽会や合唱コンクールをはじめ、各市内小中学校音楽会、埼玉県小中学校音楽会中央大会等、全て中止に。まさに翼をもがれた鳥のようであった。

しかし、そのような厳しい状況の中、音楽科の教員はネットワークを活かし、創作や鑑賞、多様な打楽器を活用した器楽等を中心に、新たな教材やより工夫した指導の在り方等について互いに情報を共有し、この二年間を必死に乗り越えてきた。

臨時休校から三年目を迎えた今年、ようやく音楽科にも復活の兆しが見え始めた。マスクはまだ外せないものの、多くの小中学校で校内音楽会や合唱コンクールが、また各市内小中学校音楽会も三年ぶりに開催されるようになってきた。お声かけをいただき、審査等で久しぶりに子供たちの歌声や演奏に耳を傾ける多くの機会をいただいている。

今回が最初で最後の合唱コンクールとなった中学三年生も多い。ステージでの彼らの歌声には、声を出して皆と歌える喜びに溢れ、聴いていると思わず涙腺が緩むことも多い。

皆でともに奏でる音楽が、生活をこれほど豊かに彩ってくれる心地よさをあらためて噛みしめている。

友と心を合わせ、自分たちの音楽を精一杯に創り上げようとしている子供たちに、そしてつながる力で大変な状況を乗り越えた音楽科の教員に、心から感謝とエールを送りたい。

「七〇歳の正解」に向けて

高田信一郎

「図書館の先生。おはようございます。昨日は、読み聞かせに来てくれてありがとうございました。」

先日、今の仕事場で一年生の児童に言われた言葉です。現在、退職後五年間勤めていた川口市立教育研究所の勤務を終え、川口市内の小学校で学校図書館司書として勤務をしています。本に囲まれた環境で、今までとは違う毎日を過ごしています。環境というものは恐ろしいもので、あまり読書に興味のなかった私も、落ち着いて本に親しもうという気持ちが芽生えてきました。

そんな時、新聞の中吊り広告に和田秀樹氏が執筆した「七〇歳の正解」という本が目に止まりました。翌日、さっそく、ネット通販で取り寄せました。

六〇代では約「四〇人に一人」だが八〇代では約「三人に一人」になる数字【認知症の有病率】即ちボケる人の割合だそうです。脳だけでなく、健康も見た目も分岐点は七〇歳。今まで通り若々しい人でいるか、一気に老けこむかは、六〇代から七〇代にかけての生き方で決まるそうです。

特に目に止まったのが、「段々と減る一〇の動詞」です。紹介します。

あ・歩く　ゆっくり歩くことで心肺機能と筋肉を鍛えましょう。

か・噛む　栄養状態がよくなるうえ、咬筋を動かすことは、脳への刺激になります。

さ・さぼる　適当に怠けて、疲れを取ることも老後には重要です。

た・食べる　栄養状態をよくすることはとにかく重要です。

な・和む　うまく気持ちを和ませてストレスを解消しましょう。

は・話す　話し相手がいないと悪徳商法（詐欺）に引っかかりやすくなります。

ま・学ぶ　勉強は、最高の脳の健康法いつまでも好奇心をもつ。

や・役立つ　「人の役に立つ」という目標があれば、元気に生きられます。

ら・楽観する　何事にも明るく前向きに考える事が、心身に好影響をおよぼします。

わ・笑う　よく言われる事ですが、本当です。

つまり、「あかさたなはまやらわ」の一〇の動詞を減らさない生活が大切だと著者は教えてくれました。

そう考えると子供達と本を媒体として会話し、書架の整理をするために歩き、栄養たっぷりの給食をいただいている生活は、「七〇歳の正解」に近づいているのかもしれません。

日々雑感

人と人とのコミュニケーションの中で…

磯　奈保子

コロナウィルスが世に広がり始めてから約三年。学校生活にも様々な制限があり、授業でも学校行事でも、子供たちには我慢をさせることばかりである。それでも少しずつ緩和され、各学校ごとに創意工夫し、形を変えながらも学校行事が実施されている。

音楽科は、歌うこともリコーダーや鍵盤ハーモニカも扱えず、校歌さえろくに歌えずにいたが、合唱コンクールを実施できている中学校も多い。

そのような中での昨年、全クラスの合唱づくりに関わる機会をいただいた。合唱コンクールに向かう生徒たちのモチベーションがとても高く、「青い空ってどのくらいの青さ?」「遥かってどれくらい先のこと?」…イメージを膨らませながら歌詞やフレーズを大切にする歌い方、発声方法、抑揚のつけ方等、技能につなげていくと、生徒たちは水を得た魚のように合唱を楽しみ、あっという間に質の高い合唱に仕上げていった。久方ぶりに改めて音楽の楽しさを、生徒とともに感じられたことがとても楽しく嬉しかった。

今年は十一校で合唱コンクールの審査をさせてもらっている。その一校は、私が初任校長として着任した小学校の三年間に迎えた新入生が、ちょうど中三～中一に在籍している。嬉しいことに覚えてくれている生徒も多いようだ。あんなに甲高い声で、元気いっぱいに歌っていた子供たちが、なんてステキな合唱ができるようになったのだろう…。そして、少しヤンチャだった子供たちが、涙を流してもらった賞を喜び、互いの良さを認め合う。そんな素直で温かい中学生に成長してくれていることに感無量で涙があふれそうだった。

余談になるが、閉会した後、「磯先生に書いてほしい」と鉛筆書きの賞状を持ってきた。小学校長だった頃、賞状や卒業証書は、乱筆ながらも私が書かせてもらっていたことを知っていたからのようである。これもまた、嬉しく感激した出来事だった。

学校生活はまだまだ元どおりというわけにはいかず、給食は全員前を向いて黙食。三年間マスクを外した友達の素顔を知らないまま卒業を迎える生徒も少なくない。コロナ禍に加え、働き方改革も課題となり、部活動も大きく変化する。今後、学校教育に求められているものは何なのか見失いそうになる。学力ももちろん重要であるが、人と人とのコミュニケーションの中で成長できることも忘れたくない。

地域とともに

赤川　富男

コロナ禍となって3年以上が経過していますが、依然として収束が見られない状況下にあります。私は35年間吉川市の住人でありながら、吉川市の学校に勤めたことがなく、地域や子どもたちのことなど、知らなかったことを痛感しています。そこで、地域に関心を寄せ、地域のためにできることをテーマとして、次の二つについて取り組んでいます。

その一つは、今年度から自治会の役員に加わり、少しでも恩送りができたらと考え、様々な地域活動への手助けをしています。私のこれまでは、自治会の活動においては、受動的な姿勢でいました。実際に役員として活動してみると、如何に地域の実情を知らず、自治会のことも分かっていないことを実感させられました。近年、少子高齢化の影響もあり、自治会加入率の低下、役員の高齢化、地域行事への参加者の減少等、様々な課題があります。改めて、自治会の役割を精査し、地域への責務を検討して、地域のため、住民のために、理解と協力を得ながら、微力ではありますが実行力を発揮し、地域の連帯感をより高めたいと考えています。特に、災害時においては、地域の助け合い（共助）が、一番の防災力や復興力となることを信じて、自治会の結束をさらに強固にしていきたいものです。

二つ目は、自分がこれまで関わってきた教育関連において、「自分に何ができるのか」と考えました。吉川市の教育支援センターにて、子どもたちと関わることではないかとの思いに達しました。ここでの主な業務は、電話や来所による相談、通室児童生徒の学習支援、市内巡回による補導活動、各学校へのあいさつ運動などがあります。相談の主たるものは不登校に関するものが多く、児童生徒は百人百様の要因で学校に行けずに、こちらに通室しています。ここでは、学習支援、様々な体験活動、コミュニケーション、相互交流等を通して、少しでも自立する力、社会で生きる力を養成しています。今さらながら学校復帰が全てではなく、心のエネルギー回復や心理的変容を図りながら、いかに未来を見据えてどう生きていくのかを、一人ひとりに問いかけながら、支援していかなければならないと考えています。しかし、一人ひとりの思考や生育環境の違いなどがあり難しいことですが…。

以上の二つが、私の当面の活動基盤になっています。私自身は、地域とのつながり、人々との関わりをこれからも大切にしていきたいと思っています。

教育情報

「特別活動を中核として推進する防災教育の一考察」

～防災に係る地域参画を通して自助・共助の力を育む生徒会活動～

川口市立鳩ヶ谷中学校
校長　瀧　沢　靖　雄

1　はじめに

本校は大宮台地の縁に位置しており、一昨年の台風19号の折には、300名超の避難所となった。本校の地理的条件を勘案すると、正に自助と共助の力の育成が必要と考えた。本校では避難訓練や避難所開設に係る訓練等について教育課程に位置付け、特に生徒会活動を通して自助と共助の力の育成を目指した。

2　研究主題

「非常時の危険を予測・回避し、自ら率先して行動できる生徒の育成」

本校では、避難所開設時に教職員が立ち会うことが困難な状況下にあったとしても、生徒会活動を中心として身に付けた力を基に、地元自治会の防災部の方々と避難所を運営することができる力の育成を追求しようと考えた。

3　研究の方法

(1) 防災リーダーの育成

市の危機管理課や地元消防署との連携による「防災リーダー認定講習会」を実施した。内容は、〈総論〉と〈実技〉講習会で認定を受けた防災リーダーが、避難訓練において避難指示を出すなど、指導的な役割を担うことが肝要である。

(2) 避難所開設訓練（ＨＵＧ）の実施

各学級で生徒会役員や保健委員がリーダーとなって、避難所を模した紙上訓練を行った。内容項目は、①受付の設置②通路の設定③避難者の配置などである。有事においては、自らが、避難所の運営者になるということを学ぶ機会の柱となった。

(3) 地域合同防災訓練の実施

地元自治会との連携による、合同防災訓練を実施した。内容は、①傷病者救護訓練（保健委員会）②救助袋降下訓練（生徒会本部及び保健委員会）③炊出し訓練（給食委員会）④応急救護訓練（保健委員会）である。

4　研究の成果

生徒の自助と共助意識調査の結果として、次の様な傾向が判明した。

(1) 自助項目では、災害発生時に自ら判断して危険回避することに、全体では84％の生徒が肯定的な回答をしているものの、自信をもって「あてはまる」と回答した者は、19％にとどまっている。

(2) 共助項目では、自治会の人と協力して避難所開設や役割を自覚した行動をすることについて、防災リーダー講習を受けた生徒の回答が肯定的であったのは、一定の成果である。しかし、全体では55％と、肯定的な回答の割合が高いとは言えない結果であった。

5　考察と課題

本研究において「自助」のみならず「共助」について研究の対象として強調したのは、新学習指導要領の特別活動において整理された、３つの視点を重要視したからに他ならない。共助の力を培うための手立てとしては、生徒会活動を行う本校生徒と地元自治会防災部を中心とする地域の人々との関係性を構築する活動過程を経ることにより「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の３視点を網羅することができると考えたからである。

今後も地域の避難所としての役割を果たすべくより一層、実利のある防災リーダーの育成や合同防災訓練を実施することにより、自助と共助の力を発揮することのできる人材育成を目指す。

お詫びと訂正

柏樹25号に掲載させていただいた石井喬先生の文章に誤りがありました。お詫び申し上げ、次の通り訂正させていただきます。

・１段目11行目　何故に→如何に
・３段目３～４行目
　家族。生徒達→家族・生徒達

編集後記

会報「柏樹」第26号をお届けいたしますと共に玉稿を賜りました皆様に心より感謝申し上げます。

新型コロナウイルスの感染がいまだ収束せず、心配な状況ではありますが、ウィズコロナの中、落ち着いた日常の生活がもどることを願うばかりです。

（林　俊幸）